
ウィザードライセンス

七篠雅大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザードライセンス

【Nコード】

N6931Y

【作者名】

七篠雅大

【あらすじ】

魔法使いって言っても、そんなに便利なもんじゃないですよ——。そう諭してみたものの、あの鬼社長は俺を雇用しやがった。トラブル解決屋「NaN」の社員たちと社長が繰り広げる、魔法2割・雑談8割のアクションコメディ。

……評価とかコメントとかくれたら、かなり喜んで一日中ハイになります。

第一話 俺からの依頼

「意外だな。君がまだガスや水道を使っていたなんて。公共料金もバカにならないだろう？」

時刻は午後十時。葉瀬川黒、性別女、年齢不詳、職業トラブル解決「NaN」社長を部屋に案内すると、いきなりそんなことを言われた。

「いやいや、当然だと思いますよこれぐらい」

「そうか？ でも君なら指から火を出せばいいし掌の器に水を出せばそれで済むと思うんだが」

「いちいちそんなことやってたら、今度はエンゲル係数が大変なことになるですよ……」

いくら魔法を使えるからと言っても、何も無いところから何かを生み出すことはできない。対価として自分の体内のエネルギーがかなり持つていかれるのだ。当然、腹が減るし、それ以前に乱発していたら体がいくつあっても足りない。

「それもそうだな。この間一回やってた雷落とすヤツとかは、もうなんか死ぬ一步手前って感じだったし」

「それを見て腹抱えて笑ってたのはどこの誰でしょうかね」

「あ、それアタシだわ」

悪びれる風もなく言うのでたちが悪い。

「『新魔法開発した』とか言うから見てやろうとしたら、張り切りすぎてでっけえ雷落として体力九〇パー以上使い果たすとか……笑い話にしかならんだろう。あ、思い出したらまた笑えてきた」

くつくつくと笑いを漏らす黒。前から思っていたが、性格悪いなこの上司。

「はあ……。なんでもいいですけど、そろそろ本題に入りましょうよ」

「ああ、そうだったな。確か、君から依頼があると言っていたな。」

分かっていると思うが、社員でも金は払ってもらうぞ」

「まあ、そういうと思ってましたけど。六万は痛いですよ……」

渋々財布から諭吉を六人取り出して、黒に手渡した。

「毎度あり。あ、前から思ってたんだが、毎度ありって初めての客にも使っているものなのか？ 毎度じゃないのに」

「さあ？ 次からもよろしくって意味で使えば問題ないんじゃないですか？」

「おお、なるほど」

本気で感心したように黒が言った。性格悪い上に、どこかズレている。まあ、ズレていなければ「トラブル解決屋」などという胡散臭い商売はしないだろうが。

「で、依頼内容は？」

「えーとですね……」

話は、一週間前にさかのぼる。

俺、吉川芳紀、性別男、二〇歳、職業トラブル解決屋「NaN」社員、魔法使いがこの部屋に越してきた時の話である。

一通り荷物や家具などを新居――二階建てアパートの一室に運び込んだ俺は、いろいろと困ったことになった。

とりあえず一段落したので、覚え立ての煙草でもふかそうかとベランダに出た。ライターどこやったつけどポケットをまさぐるが、出てこないの、仕方なく指に火を灯した。一瞬だけで良いし、火の大きさもそれほどではない。体に支障をきたすほどの魔法でなければ、まあたまにこうして使うことはある。

しかし問題はそこにあるのではない。

隣人に、その場面を目撃されてしまった。

「どうやって火を出していたのか」などとしつこく問いつめられてしまい、もうヤケクソだどうにでもなれといった調子で自分が指から火を出すどころかいろいろなことができる（要するに魔法が使える）ことを教えてしまった。初めは何かのトリックではないかと

疑っていたようだったが、本当に種も仕掛けもないということが分
かると、隣人は「一人にさせてくれ」といつて部屋の中に引きこも
ってしまった。

おそらく、今までに見たことのない怪奇現象を目にして混乱して
しまったのだろう。

それだけなら、まだ良かったのだが……。

「翌日からですよ。早くこのアパートから出ていけって感じで、嫌
がらせみたいなのが始まって。ポストに新聞の見出しの文字を切り
抜いて作った『出ていけ』みたいな手紙が入ったり、部屋の前に
ゴミが捨ててあったり……」

「ちよつと待ちな。どうしてお前が出ていかなければならない？」

「こつちが聞きたいですよ……まあ、隣の部屋の人間がバケモノだ
ったらそりゃあ嫌でしょうに」

自虐的な笑みを浮かべてみた。別に本気で言ったわけではないの
だが、

「ばかもの」

と、黒に頭を殴られた。

「痛っ、何するんですか社長」

「自分のことをそんな風に言うな。お前はバケモノなんかじゃない、
むしろばかものだ。……お前は、ちゃんとした一人の人間だろう」

ふん、と鼻息荒く黒が言った。

「社長」

「何だ」

「優しいんすね」

また殴られた。

「じゃあ、とりあえずお前がここでちゃんとのんびり暮らせるよう
に嫌がらせを止めればいいんだな？」

「まあ、そういうことになりますね」

「ホント、魔法が使えるつつうのも困りものだな」

「この時代には合わないんですよ。あーあ、時空間魔法でも使って昔に飛べりゃあな……」

「ンなことしたら、お前死ぬぞ？」

「分かってますよ」

時間をねじ曲げるといふのは、おそらく魔法の中でもかなり次元の高いものだろう。そんなものを使えば、俺の体の中のエネルギーはまるまる持っていかれ、走馬燈を見る暇もなく一瞬で果ててしまうであろうことは、想像に難くない。

「うむ……どうやってたら嫌がらせが止まるか、検討してみよう」

「はい」

話し合いが始まった。このような仕事上の話をする場合、黒は真剣な表情になる。

「じゃあ、こんなのはどうだ？」

「何でしょう？」

「大規模魔法を見せてつけて『嫌がらせすんなやオラ』と脅す」

「たぶん逆効果、でしょうね」

相手はこちらがそのような行動に出ることを危惧して、早く出ていけと言っているのだ。火に油を注ぐようなことにしかないだろう。

「それに、そんな魔法を使ったら俺が疲れますし、何よりほかの住人にまで俺がバケモ……魔法使いだってばれますよ。そんなことになつたら、事態が悪化するばかりです」

「それもそうか」

難しいものだな、と黒が唸った。

「……普通に暮らし続ける、っていうのも悪くない手かとは思いますが。俺に危険性が無いってことを認めてもらえばいいわけです」

「いや、そのイメージを覆すのにどれだけの時間がかかるかを考えると、どうにもそれじゃキツそうだな。毎日毎日家の前に残飯ベツトリじゃあお前の気がおかしくなるだろう」

「そうですね……。はあ、いい解決方法はなしか」
結局、話し合いは行き詰まった。

その後、まあとりあえず殴り込むかという結論に至り、芳紀と黒は隣の部屋を訪ねた。

ぴんぽーん

「すみませーん、誰かいますかー」

「そろそろ諦めましょうよ、社長。さすがに十分も家の前に居座られたら、向こうも困りますって。時間も遅いですし」

「困っているのはお前の方だろ？」

「いや、そうですけど……」

何度呼びかけても、隣人は結局出てこなかった。

未練がましく再度呼びかけを続ける黒を引っ張って、自分の部屋に戻ろうとしたその時。

「あら、そこに住んでいた人、一昨日引っ越しましたよ」

さらにもう一つ隣の部屋の住人が、親切にも教えてくれた。

「でも昨日も嫌がらせあったんすけどね。窓に残飯が張り付いてました」

「もうそれ警察に届けるか大家に言うかしたほうがいいだろう……」
黒が呆れたように言った。

「でも、隣の人は一昨日には引っ越してっただから、あの人の作業じゃあないってことですよね」

「まあ、そうなるな。というか、そもそもどうして隣の人間の犯行だと思ったんだ？」

「だって、あんなことがあった翌日ですし、わざわざ余所の人間が毎日律儀にイタズラしに来るのも思えませんでしたし……」

「そいつはお前の魔法を怖がっていたんだろう？ だったら刺激するような真似をするはずがない」

「ああ、確かに」

言われてみれば、隣の人間が嫌がらせの犯人だと断ずるには証拠が不揃いである。どころか、黒の言うように自ら仕返しを受けそうな真似をするというのは考えにくい。早とちりをしてしまったのかもしれない、と少し反省した。

「だが、隣人が犯人じゃないとなると、じゃあ誰がそんなことをしたんだ？」

黒が当然の疑問を口にした。

「さあ、職業柄どこで恨みを買ってもおかしくありませんからねえ」

「それを社長の前で言うとはいいい度胸だな」

「でも間違っていないでしょう？」

「……そうだな」

渋々と言った顔で黒が首肯した。

「とにかく色々探るためにも、まずは腹ごしらえだな。飯にしろ」

思考を放棄したかのように、黒はごろりと寝ころんだ。いや、ここ俺ん家なんすけど。

「そうですね……えーと、何かあったっけ」

「鍋がいいな」

「いいですね、鍋」

いいですけど、鍋なんてできる経済力はないです。給料低いし、ついさつき諭吉六人さらわれたし。できたとしても湯豆腐までだ。

冷蔵庫を見ると、卵が二つ。あと、マヨネーズとドレッシングがある。いや、それだけしかない。続いて戸棚を覗いても、カップラーメンやらインスタントラーメンやらの文明の利器もとい利食は見当たらなかった。

「社長、残念ながら湯豆腐はできそうにありません」

「湯豆腐ってできても残念感があるけどな。あと私は湯豆腐を鍋だと認めん」

「なっ……！ 湯豆腐おいしいじゃないですか、湯豆腐に謝れ！」

「そんなに好きか湯豆腐……。まあいい、だったら出前取れ」

時計を見ると、すでに十二時を回っている。さすがに無理だ。

「おっ」

炊飯器を見ると、かるうじてご飯が残っていた。これで何とかでないだろうか。

「社長」

「なんだ？」

「卵かけご飯って、湯豆腐の次の次くらいに美味しいですよね」

本日の夕飯。

ご飯一膳、卵一個（一人分）。

ちなみに醤油はありませんでした。

第二話 起床、そして出勤

「……ん？」

どうやら、昨晚卵かけご飯を食べた後、すぐに寝てしまったようである。時間は一時を回っていたし、仕事終わりに依頼を聞いて貰っているという動き回ったので、俺も黒も疲れていたのだろう。

「あ、そうだ」

今になってやっと気づいたが、黒はどこに……。

「ごそつ。」

「うゝん……」

布団も敷かずに寝てしまったので、床の上ではあるが。

隣に黒がいた。否、寝ていた。

「おいおい……」

顔から、体中から血の気が引いていくを感じる。もしかこれは「一夜をと共に過ごした」ということになってしまふのだろうか。

いやいや、やましいことなどないのだから問題なからう。しかし、見た目年齢で「自主規制」歳になる黒と寝たというのは、何とも気が重くなる。確かに黒はそれなりに美人ではあるが、見た目「自主規制」歳の女性、悪く言えばオバハンと寝る趣味はない。俺は……。

「俺は熟女趣味なんかじゃないんだああああ」

「うるするええ！」

翻訳すると、うるせえ、である。おそらく。寝起きでしたが回らなかったのだろうか。

黒のチョップが俺に襲いかかった。

「っ痛う……！」

「おい、朝っぱらからなに叫んでるんだ」

「社長も今し方『うるするえ』という奇声を上げたところでは……」

「お前のせいだ」

指摘されて思わず二の句をつけなくなる。

「って酒臭っ!？」

「当然だろ。飲んだんだから」

どうやら俺が寝落ちしてしまった後も、すっかり一人で酒を楽しんだらしい。

「ていうか多分俺の酒ですよ、それ」

「だから当然のことばかり聞くな。というか酒があるなら早く言え。卵かけご飯と一緒に飲んだ方が絶対うまかった」

俺の渾身の一品をおつまみ代わりにしないでください。

渾身といっても、それしかなかったただだが。

「まあ酒代は後で給料から引いとくから安心しろ」

「足してください」

なぜ自分の酒を飲まれた挙げ句給料までさっ引かれるのだ。

「はあ……。もういいです、酒の話は。依頼を解決してくれるんでしたらチャラにします」

「そうか」

まだ本調子ではないらしい黒が適当にうなずいた。頭を痛そうにしているの、二日酔いだろうか。黒はぐるぐると首を回して、欠伸をした。

「とりあえずお前の件は夜に処理していくとして、今日も出勤しないとな」

「やっぱりそうですよ」

俺も黒も、一応は社会人である。時間はきちんと守らねばならない。トラブル解決屋「NaN」の事務所が開くのは午前十時だ。普段からそれほど客が多いわけではないので、この時間でも特に問題が生じない。

客が少ない故に始業時間は遅いが、なにぶんグレーな商売なので、それ相応のグレーな客もしばしば訪れる。そのため終業は午後十二時である。昨日早く仕事を終えた（といっても、社長は俺の依頼を

聞くという業務をしていたが）のはあくまで特例で、普段はかなり遅くまで仕事をしているのだ。

仕事といっても、本当に客が少ないので事務所の机についているだけののだが。

「時計時計つと……」

「壁掛け時計とか置き時計とかないのか？」

「ああ、はい。一人暮らしする分には腕時計があれば十分ですし。目覚ましはケータイを使っていますね」

もっとも、一人暮らしではそもそも時間自体さほど気にする必要もないので、家の中では腕時計も外しているが。

「ごそそと部屋の中を這いずり回って、やっとのことで腕時計を発掘し、時計をのぞき込む。」

すでに、十時半を回っていた。

「社長」

「なんだ？」

「走りましょう」

俺の家から事務所までは、徒歩で五分、全力ダッシュなら二分の距離にある。そのため自転車や自動車などの通勤手段は用いない。それでも俺も社会人の端くれ、中古車ではあるが車も持っているし免許もある。

しかし、本来ならば、走った方が車で行くよりも近い距離だ。だから走ろうと黒に提案したのだが――

「頭痛い。無理、走れない。車で送ってくれ」

「――という鶴の一声で、結局車で事務所に向かうことになった、のだが。」

「この距離で渋滞かよ……」

「全くだ。何をしているんだ。ぐずぐずしている暇がないことぐらいわかってるだろう」

「アンタよりはわかってるよ!」

そう言ってみても、黒はいつものように、悪びれる風もなければ全く動じてもない。いや、「悪びれる」とか「申し訳なく思う」とかいう単語は、この人の辞書には載っていないのかもしれない。なら仕方がない、と諦められる問題でもないが。

「何をしているんでしょうね、ホント……」

そして、誰のせいでこんなことをしているんでしょうね。

カーステレオに付いた液晶には、「10:52」という時刻が表示されている。これほど大幅の遅刻は、基本真面目な俺にとっては初めてのことだ。

「はあ、こりゃ幸崎さんに怒られるだろうなあ……」

「あいつは厳しいからな」

「せめて社長もあれくらい厳しくなってくれたらいいんですけどね」

「安心しろ、アタシは遅刻くらいじゃ怒らない広い懷を持っている」

「ありがとうございます。でもせめて自分にだけは厳しくなってください」

「嫌だね」

にやにやと笑って黒が言う。弄ばれているようで良い気がしなかった。

結局、事務所に到着できたのは午前十一時を回った頃だった。

第三話 危ない仕事

「ふう……おはようございます……」

「遅いよ芳樹君。遅刻一時間以上なんて、新人のする事じゃ……つて黒さん!？」

「よっ、幸崎」

事務所に到着した俺と黒を出迎えたのは、幸崎靈華、性別女、二六歳、トラブル解決屋「NaN」の社員だった。非常に厳しいが（黒曰く「指導癖」）、柔和な笑みを作ることのできる彼女は、基本的に受付の仕事に回っている。

今日もその指導癖で俺に注意をしようとしたようだが、黒を見てよほど驚いたのか、しばらく口をあわあわとさせていた。

「どうした幸崎？　なんか変なことでもあったのか？」

「……黒さん、昨日確か早退して吉川君のところに……」

「ああ、行ったな」

「ですよ……。おまけに黒さん、なんかお酒のにおいするし……。

それで、一緒に出勤って、まさか昨日……」

わなわなと震える靈華。なんだか、嫌な予感がした。

「ああ。寝たぞ、一緒に」

「何でそういう言い方しかできないんですか社長!」

「やっぱり、そうなのね!　そうだったのね!」

そうだったのねー、と叫びながら謎のハイテンションで乱舞する靈華を後目に、黒は「ん?」という顔をしている。本当に意味が分かっているのかもしれない。

そんなんだから結婚できないん……。

「痛い!」

黒から前振りなしにチョップが襲いかかった。

「なんで殴るんですか!？」

「いや、なんか失礼なこと考えてたっばいから」

「まさか……俺の本音を見破っただと!？」

「そこで本音っていったらいろいろアウトだけだな」

黒が苦笑いした。あっち系のことは鈍くても、こういう自分に対するイメージなどのことには鋭いらしい。野生の本能のようなものなのだろうか。

その後、未だに乱舞を続けている霊華をなだめるのにしばらく時間がかかった。

「そう、依頼の話をしてたのね。……でも、それが遅刻して良い理由にはならないわよ？」

「すいません……」

「まあ今回のことは大目に見てあげるわ。なんか大変そうだし」

大変そう、というのは、俺が黒に出した依頼の内容のことだろう。

「ただ、いくら時間がないと言っても、着替えくらいはしてきてほしかったかな……そのシャツも何も、昨日のままじゃない。お風呂も入ってないんでしょ、どうせ」

「うっ……」

たしかに、本当に必死で急いできたので今まで気づかなかった——というか気が回らなかったが、俺も黒も服装は昨日のままだ。まあ、黒に関しては着替える服自体がないので当然だが。

風呂に入っていないので、体臭もかなりきついのもかもしれない。それでも、黒の酒臭さと比べればましである。……と、信じたい。

「とりあえず、奥のシャワールーム使って良いから、さっさと行ってきたさい。どうせ客はほとんど来ないんだし」

「ここシャワールームとかあるんですか!？」

「知らなかったの? 一仕事した後に入るお風呂は気持ちいいよー?」

お風呂と言ってもシャワーだけなんだけどね、と霊華が付け加える。まさかこの謎事務所にそんな施設があったとは。

「替えのシャツもあるから用意しとくね。ほら、黒さんも早くシャ

ワー浴びてきて」

「んー……頭痛い……」

「まったくもう……」

靈華が俺に説教をしている最中、黒は、二日酔いの頭痛がまた襲ってきたのだろうか、ノックダウンしていた。事務所入り口にある来客用のソファでぐったりと寝ている。

そんな時である。事務所の入り口から、二人組が入ってきた。

「おーっす……」

やってきたのは待ち望んだ依頼人ではなく、向日槇、性別男、二五歳、トラブル解決屋「NaN」社員と。

「疲れた……」

瀧澤咲、性別女、二二歳、同じく「NaN」社員だった。

「あら、槇君、咲ちゃん。お帰り」

靈華が槇と咲を出迎える。当然のことながら、俺と黒が出勤したときよりも対応が柔らかである。どうやら槇と咲は今まで仕事をしていたようだ。

「ふええ……今回こそ死ぬかと思った……」

「そんなに大変だったの？ 暴力団のお手伝い」

「なっ！？」

思わず声を漏らしてしまった。

確かにここはトラブル解決屋。胡散臭い依頼や多少危険を伴う依頼も舞い込んでくることはある。だがそれでも一般人の常識から逸脱しないレベルだった。少なくとも、ここに入ってから俺が請け負った依頼は。

しかし。

「ああ、わりと大変だったぜ。なんせ機関銃持ち出してきやがって相手の組。拳銃くらいならまだ楽だけどよ、盾にした車が吹っ飛んだ時はさすがにビビったぜ」

「ビビっただけで済む槇君はいいよね……。はあ、私なんか本当に生きた心地がしなかったよ」

「あら。まあ、お疲れさま」

事務所の面々は誰も皆、平然としていた。
ちなみにそのとき俺は啞然としていた。

「あ、シャワーさっさと使ってたきなさいな、芳樹君」

「あ、はい……」

あまりの「世界」の違いに面食らった俺は、半分無意識でふらふらとシャワールームに向かった。

シャワーを浴びながら、いろいろなことを考えた。

自分は本当にこのままこの事務所で働いていいのか。ここで働くことによって死ぬことはないのか。また、誰かを死なせるようなことはないのか。

先ほど槇と咲がしていた話からすると、どうやら二人は暴力団の手伝いのようなものをしていたらしい。銃撃戦があったようなことを言っていた。にわかには信じがたいことだが、もし事実なのだとしたら、相当に危険なことに足をつっこんでいることになる。

これは、誰がどう見ても、ヤバイ。

「ん……ああ、お前か」

シャワールームから出ると、黒がソファアに座っていた。彼女も女性用のシャワーを使っていたようである。濡れた髪をタオルで拭いているところだった。

「社長、聞きたいことがあるんですけど」

「どうした？ ビビったか？」

見抜かれていた。

「……はい、正直」

「プッ」

「笑わないでくださいよ！ ああ、もう。……あんな仕事、よくあるんですか？」

「あそこまでのさはすがによくあるとは言えない。まあ、多くて月イチだ」

「十分多いですよ……」

「安心しろ、今のところお前にそういう仕事を回す気はない。だってお前は」

新人だからな。

黒は、そう言った。

「まあ、もうそろそろお前がここにきて二ヶ月……ってどこか。新入社員も、この頃になると、この仕事がどれだけヤバイもんかってことに気づく。それで大抵の奴は三ヶ月でやめていく」

「……」

「まあ、あいつらは三ヶ月過ぎてもずっとここにいる奴らだからな。根性ある」

「社長」

俺は覚悟を決めて、こう切り出した。

「教えてください。ここが、どんな会社なのか」

最初はな、アタシ、一人で始めたんだ。

トラブル解決屋なんて胡散臭いこと始めようと思ったのは、金が欲しかったから。

そもその前提として、アタシにはそういう「裏」とのつながりみたいなもんがあった。実家がヤクザでな……テキ屋系の。ああ、テキ屋の意味が分からないんだったら、辞書で調べてくれ。

話がそれたが、まあそんな感じでアタシは汚いことやってる金持ちの知り合いとかいっぱいいたんだ。そいつらは大抵その「汚いこと」でいろいろ困ってる。そこに目を付けた私は、そいつらから何とかして金を搾り取ってやろうとして、こんな会社を作ったのさ。

少しずつ得意さんの依頼主とかもできはじめて、経営は軌道に乗った。当然危ない仕事や犯罪まがいのことも沢山やった。そうしなければ、生きていけないからな。

お前も知っていると思うが……というかその側面しか知らなかっただろうが、当然悪人ばかりから依頼を受けているわけじゃない。

最初の頃はそういう「普通じゃない」依頼の方が多かったが、今となってはなんてことはない、善良な一般市民からの依頼が九割だ。そしてそのほとんどは、どれだけ高くても一回三万円とか、常識の範囲内の額で受けている。

……ああ、昨日のお前からの依頼は六万ぶんどったが、ありや特別だ。アタシはあそこまで外道じゃない、一般人にはな。

ただ、当然一つにつき三万とかの依頼で社員たちの給料も払えるわけがないしな。依頼の数自体が少なすぎて。

だからこそ、汚くて危ない依頼だ。

金が入る。

実はな……お前には黙っていたが、他の社員は完全歩合制だ。給料がまともにでてるのは、現時点では新人のお前だけだ。

ここにいる奴らは、まあ基本的にその報酬の多さに魅了された人間だと思っくい。ああ、悪人つてわけじゃないぞ？ 金は大事だ。あいつらも、大金が必要な事情を抱えてたりするんだよ。いろいろと、な。

まあまず間違いなく向日だけは私欲だろうが。

また話がそれて行ってるが、まあこの会社の実状はこんなもんだ。どうだ、驚いたか？

何、無理する必要はないさ。今のを聞いてここを出て行きたくなつたなら、そうするがいい。私も無理には止めようとも思わない。命の保証もできないしな。

もちろん、お前に危ない依頼を回さないようにもできるけどな。

私はそれでも良い。お前がここに残ってくれるだけで大歓迎だ。

お前が決める。

これはお前の問題だ。

ここで働くか、否か。

今すぐに決める必要はないが……いずれ結論は出してもらおう。わかつたな？

第四話 葛藤

「ねえ、どうしたんですか芳樹君？　なんか頭抱え込んでますけど」
「どうやら、社長がまたなんかしたらしい」

「ごすつ。」

「言いがかりはよせ、向日。私はただこの会社の実態をありありと話したただけだ」

「ちょ、社長、物理はだめ物理は！　音が、音が生々しい！」

「まあ、そのうち元気になるわよ。……今は、そつとしておいてあげましょう」

「そつですね……」

順に咲、槇、（殴打音）、黒、槇、靈華、咲の言葉である。いや、殴打音は言葉ではないが。

俺は、同情されていた。

……正直こんなに良い人たちが、金目当てで危ないことに手を出しているとは思えないし思いたくない。だが、黒の話を聞く限りそうなのだろう。それぞれに金が必要な事情があるということを加味しても、やはり解せない。

二ヶ月前、俺は魔法の力を買われて黒にスカウトされた。今思えば、あの頃からおかしかった。

ただのトラブル解決屋——言ってしまえば、便利屋でしかない「NaN」に、魔法の力が必要であるとは思えない。黒は初めから、俺に危険なことをさせるつもりで会社に招いたのだろうか。

ふと、昨日のやりとりを思い出す。

——ばかもの。

——自分のことをそんな風に言うな。

——お前はバケモノなんかじゃない、むしろばかものだ。

——… お前は、ちゃんとした一人の人間だろう。

黒は、俺のことを一人の人間としてみている。

今回の俺から黒への依頼も然りだが、この力を持っていて幸福だったことなど、かつて一度もない。いや、ライターをなくしたときには便利だが。

基本的に、俺の力を知った周りの人間は、俺から離れていく。興味本位で近寄ってきた奴も多少は居たが、俺の魔法の危険性について深くしるにつれ、離れていった。

だが、黒は俺の魔法を受け入れてくれた。

事務所の他の面々も、だ。

ここには、俺と同じとまでは行かないものの、似たような境遇の奴ら——理不尽な不幸を背負った奴らが多いからなのかもしれない。黒の言うように、大金が必要になるほどの、何かを。

……槇だけは本当に私欲のためにここで働いていて、本当に興味本位で俺の魔法を受け入れてくれていただけかもしれないが。あの先輩は馬鹿だから。

ここが、俺の居場所なのかもしれない。

だとしたら、俺はここに残るべきなのだろうか。

多少の危険は覚悟の上で、やっていくべきなのか。

結局、その日のうちに答えは出なかった。

「うつわ……ひどいなこりゃ」

「いつもこんなもんですよ。今日はマシな方です」

「いや、すまん……。正直昨日の段階だと、どうせたかが嫌がらせだろうと思うってたけど、実際に見るとこれはひどいわ」

「思ってたんですね……」

まあ、普段から暴力団の抗争とかに関わっている会社の社長だったら、そういう感想を持つのも仕方ないかもしれない。今だからこ

そそう思えた。

だが、それとこれとは話が別である。

まあ確かに、これはひどい。どう見ても、誰が見ても。いや、俺はもうこのレベルなら見飽きたが。

現在の時刻は午前零時三十分。場所は吉川芳樹、つまり俺の自宅前。

玄関口のドアには、なにやら得体の知れない物体が張り付いている。言葉では言い表せないほどグロテスクで、かなりきつい異臭を放っている。

本当に…… なんと言い表せばよいのか。「腐ったパイ生地と嘔吐物を混ぜ合わせて赤と紫と黒で着色したもの」とても言えば想像は…… できないだろう。たぶん、今読者が想像しているものの八倍はひどい。もし何かの間違いが起こってこの作品が出版、はたまたアニメ化されたなら、そこには確実にモザイクがかけられるだろう。ブルーレイやDVDでも除去されない…… というかそんな修正はだれも望まないほど、とても言えば少しは伝わるだろうか。

…… 弁解のために言っておきますが、「赤と紫と黒で着色した」の黒の部分に、社長に対する悪意は込められていませんよ！

「とりあえず、掃除…… じゃない、除去、いや削除しないと……」

「どれだけこの物体に嫌悪感を持っているんですか」

「どれだけってそりゃあ、この世に存在して欲しくないくらいだな。臭いし。ああ、どけたいけど触れそうにないな……」

「任してくださいよ。馴れてますから」

俺は右の掌をその謎の物体に向け、ただひたすら「消える消える消える消える……」と念じた。すると、徐々に物体が—— 臭い煙を上げながら—— 霧散していく。

「げほっ、げほっ…… 臭っ！ ああ、この臭いはお得意の魔法でどうにかなんらか！」

「すいません、今消す方に集中してるんで話しかけられないください」じゅう、と音をあげて物体が完全に消失したのは、それから三十

秒ほどたつた頃だった。

「ぐっ……はあ、ひどかった」

「ハア、ハア……。ま、毎度のことながら疲れます……。あ、ちょっとミスった」

「何だ？」

肩で息をしながら先ほどまで物体が張り付いていたところを見ると、玄関の扉が少し欠けていた。というか、真ん中あたりが抉られていた。

「あーあ……社長のせいで集中が鈍った」

「アタシのせいなのか!？」

「ふう、疲れた。ここ賃貸なのに……大家さんに怒られそうだなあ。まあ、とりあえず入ってください。作戦会議です。ああ、今日はちゃんと帰ってくださいよ？ 酒も禁止です」

「無視か!」

そんな黒の発言さえ無視して、俺はドアの鍵をあけて中に入った。

落ち着きを取り戻したところで、俺と黒は話を始めた。

「じゃあ、本題に入る……っと、その前に、意思確認だ。今日の話だが……決定をすぐに迫る訳ではないにしろ、その決定の時までもうするかくらは早めに決めておく必要があるだろ？」

「それはつまり、とりあえず働くかどうか、ということですね？」

「そうだ。もしその決心に数ヶ月もかかるようだったら……そのときまでの生活費はどうするか。『とりあえず』うちで働き続けるか、他に職を探しておくか」

「他の仕事が見つかったら、もうそのままそっちに流れてしまいそうですね」

俺はため息をついて考える。

確かに「NaN」は危ないし、あまりクリーンな会社とはいえない。しかし、魔法が使えてしまう俺は、人間関係に難があるというのも確かだ。

一度俺の力が職場で露見（まあ俺が使わなければ済むことなのだが、特に意識せず習慣で使ってしまうことがある）してしまえば、すぐに俺は職場で避けられるようになる。いわゆる「ぼっち」という奴だ。

それに比べると、多少危険であるにしても……いや、危険な仕事は回さないとまで言うてくれているのだから、ここにいた方が良いと思える。「居場所がある」というのは、俺の中ではかなり優先される事項なのだ。

今まで俺には、居場所がなかったから。

「……あんまり危ないことに手を出したくないので結論はもう少し先送りにしておきますけど。『とりあえず』、ここで働きますよ」

「そうか！ いやあ、嬉しいな」

「意外です。社長がそこまで喜んでくれるとは」

「まあ、一応仲間だからな。離れるのはやっぱりあまり嬉しくない」
黒はぽりぽりと頭を掻きながら言った。もしかすると、柄にもなく照れているのだろうか。

いい歳した人に照れられてもそこまで嬉しくはない。

「何か失礼なこと考えてるな、また」

「いやいやいやいや。そんなことないですよ」

「なら、いいが……」

危つく黒のチョップが飛来する寸前というところで、何とか回避できた。

「じゃあ、これからも『とりあえず』がんばってくれよ」

「はい！」

その後、一時間ほど対策を練ろうとしたが、なにぶん手元の情報が少ないので、また何も進展しないまま時間が過ぎていった。

今日の黒は、きちんと帰ってくれた。

第五話 黒の夜

【少しだけ黒の時間】

芳樹の家から出た私は、自宅への帰路につかず、そのまま仕事をする場所へ向かった。

仕事をする場所と言っても、「NaN」の事務所ではない。依頼人に指定された場所だ。

そこは、とある港の倉庫。よく小説などの創作物で闇取引の場所などに指定されるシチュエーションだが、実際にこういう場所には特に夜は人が寄りつきにくいので、そういった「悪事」に利用される。

港までの移動手段は徒歩または電車。これも依頼人からの指定である。誰も寄りつかないはずの倉庫の近くに車やらが停まっていると、怪しまれやすいからだとか。とはいえ、車で行くほどの距離でもないことも確かなので、徒歩で十分間に合うが。

約束の時間は午前二時。そこで行われるのは、「悪事」と言っても差し支えのないこと。少なくとも絶対に正義や善事とは呼べないだろう。……一般人からすれば。

人は、大金が絡むとそれを否定する。

悪だという。

それは、人に金欲があることを誰もが知っているからだ。欲におぼれることを人は悪と断ずる。

今からアタシがやろうとしているのは、そういうことだ。

金を受け取り、悪事を働く。大抵の依頼主は私を見て「女か」と言うが、きちんと仕事をこなせばそれで文句はないらしい。

アタシは金のためなら何でもする。

生きていくためなら何でもする。

それが、アタシに必要なことなら、何でもする。

人が死ぬのは気分が悪い。だが、金をもらうのは気分がいい。決

してきれいごとでは済まない世界が、ここだ。

だからアタシは引き金を引く。

金を得ることで、大切なアタシの日常を守るために。

今日もアタシは、懐から三十八口径五連発リボルバーの拳銃を取り出し、標的に向ける。

……ああ。

アイツだったら、こんな汚い銃を使わなくても、事を済ませられるんだろうな。

指先から火を生み出し。

掌から塩酸を生み出し。

天から雷を呼び起こし。

先ほどやって見せてくれたように念じるだけで、相手を消せるんだろうな。

血など、見る間もなく。

一瞬で、依頼を解決に導いてくれるのだろう。

ああ。

羨ましいな。

第六話 諭吉が四人

携帯電話から、目覚まし用に設定したメロディが聞こえる。少し前に話題になった、ロックバンド（と言っても、J・POPの大衆向けバンド）の曲だ。

「ん……」

現在時刻は午前八時。昨日は黒が居たのであんな事になってしまったが、普段はいつもこのくらいに起床する。黒が居たからというのが理由になるかは、さておくとして。

俺は布団の中でうずくまった。季節は秋、二度寝が恋しい時期ではあるが、それで会社に遅れては元も子もないので目は開けたままにしておく。これが、いつもの朝の過ごし方だ。

その姿勢のまま、昨日の、もはや何回目かわからない嫌がらせのことや、仕事を続けるかどうかということなどについて考える。しかし、どちらの案件も考えることで解決するタイプのものではない。「はあ……なんか、疲れるなあ」

そのまましばらく考えてから、ゆつくりと布団から這い出る。改めて携帯を開き時間を確認すると、気づかぬうちに三十分が経っていた。

「うっ、寒い……」

そろそろストーブを出した方がよいだろうか。朝食として食べるパンを二枚トースターに突っ込み、顔を洗い、着替え、その間にトースターから飛び出したパンにバターを塗って食べ、牛乳を飲み、歯を磨いて髪を整える。いつもの流れの中でも、水に冷たさに驚いたり、着替えるときにいつも以上の寒さに身を縮めたりと、季節の移ろいを感じる。

もう、あの事務所で働き初めて……二ヶ月か。

「おはようございまーす」

「あ、芳樹君。今日は遅刻しなかったんだね」

「はい」

「よう芳樹」

「おはよう、芳樹君」

「NaN」の事務所に着くなり、靈華、榎、咲の三人に声をかけられた。榎と咲は昨日は仕事上がりの出勤だったが、今日は普通に來ることができたようだった。二人ともソファに座って話をしていたらしい。仲の良いコンビだ。「あ、そういうのじゃないから」

「うん。ただのお友だちだよー」

「いや、まだそこまでは考えてはいませんでした」

「でもたぶん二秒後くらいにはその結論にたどり着いていただろうな」

「うんうん、芳樹君そういう目をしてたよ。お姉さんにはわかつちやうんだから」

「はあ……」

もう、考えていることを読まれるのにも慣れてきた。俺はそんなに顔に感情が出やすいタイプなのだろうか。

「出やすい出やすい」

「そうですか……」

……もう、慣れてきた。悲しいことに。

「私と榎君幼なじみだからさ、よく間違われちゃうんだよねー。だからもう慣れたよ」

「ああ。慣れたな」

彼らもいろいろ大変らしく、慣れることには慣れ、柔軟に対応しているらしい。見習うべき、なのだろうか。

「幼なじみで同じ仕事か、なんかすごいですね。……ん？」

そのときふと、違和感を感じた。

「あれ？ 社長は？」

「ああ、仕事中よ。なかなか帰ってこな……」

靈華がそう言いかけたところで、事務所のドアが開いた。

「よう、幸崎。仕事終わったぞ」

噂をすれば影。ちょうど、黒が入ってきた。昨日の槇と咲の仕事終わりの様子と比べると、かなり元気そうと言うべきか、仕事疲れのオーラが全く感じられない。それほど大変な仕事ではなかったのだろうか。

「あつ、お疲れさまです黒さん。どうでした？」

「まあ、大丈夫だ」

「おはようございます、社長」

「おはよう社長」

「おっはー黒さん」

「徐々にフランクになって行ってるのはどうしだ……？」

ちなみに、俺、槇、咲の順だ。咲の方が槇よりも後輩なはずなのだが、黒に対してのフレンドリー度が高い。同じ女性というのが関係しているのか、どうなのか。

「まあ何でも良いけど、とりあえずアタシはシャワー浴びてしばらく寝させてもらう。悪いけど客の対応頼むぞ、幸崎」

「わかりました。ゆっくり休んでください」

……今、霊華の目が悲しそうだったのは気のせいだろうか。

黒は事務所の奥に歩いて行き、昨日使ったシャワールームに入る。それを見送ってから、俺は霊華に、さきほどの気づきのことー直球で聞くのは気が引けるので、とりあえず関係のありそうなことーを聞いた。だした。

「幸崎さん、社長さつきまで、何の仕事をしていたんですか？」

霊華は少しだけ逡巡するような素振りを見せ、答えた。

「うーん、聞かない方がいいんじゃないかしら……。ああ、それより、ちよつとやってもらいたい仕事があるんだけど、いいかな？」

「え、ああ、はい」

うまく、はぐらかされたような気がした。

霊華から頼まれた仕事は、思いの外簡単なものだった。普段やつ

ている仕事とさほど代わり映えない。いや、これが普通なのだろうが、やはり昨日今日と事務所の裏の顔を見てしまったので、何となく肩透かしを喰らった気分だ。

依頼人は二十代の男性。何でも、彼女と喧嘩をしてしまい、話しかけようにも話しかけられる雰囲気ではなく、携帯電話も着信・メール受信拒否をされているらしい。本人は謝りたいと思っているのだが、相手が聞こうとすらしないのでどうにもならないそうだ。

そこで、トラブル解決屋の出番だ。トラブル解決屋は、男女間のトラブルだろうが何だろうが請け負う。それがモットーなのである。俺がやるべき事は、その彼女さんを捕まえて依頼主の男性に会わせること。そこまでだ。それ以降は本人たちの問題ということで、干渉しないことになっている。

この仕事で重要な点は、彼女さんに「彼氏から話があるそうだ」と言っただけを願っても、どうやら拒否されそうだということ。そこで、うまく口車に乗せて指定されたカフェまで連れて行かなくてはならない……のだが、俺は口べたである。それがうまくいくかどうか。

何にせよ、できれば依頼主の男性本人から話を聞いておきたい。依頼を受諾したのは受付の霊華なので、実は詳しい話までは知らない。当然彼女さんがどこにいるのか、どんな容姿をしているのかも知らないのです、このままでは何模できない。

俺は、依頼主の男性と落ち合う予定のカフェに向かって足を進めた。

「平日なのに、大丈夫ですか？」

「ああ、仕事は有給をとったので……。そちらこそ、こんな事を頼んでしまつてすみません。本来、私が一人で片づけるべき事なのに……」

「気にしないでください。こっちも、これが仕事ですから」
カフェに着くと、身だしなみもしっかりした男性が待っていた。

さすがに平日だけあって、人も少ないし、その少ない客のほとんどが女性だったのですぐにわかった。

男性の外見は、とても痴話喧嘩をするような人には見えない。口調も丁寧で物腰も柔らかい、話しやすい人だった。

「これが、彼女の写真です。今日はたぶん仕事をしています」

男性はカフェーブルの上に一枚の写真を滑らせた。

「仕事、というのは？」

「ただのOLですよ。まあ、会社に忍び込むのは難しいでしょうからね……昼休みの時間を狙っていただけばいいかと思います」

「その時間帯、彼女さんはどちらに？」

「おそらく、あそこに見えるコンビニに来ると思いますので……その近くで彼女を捕まえていただければと」

「すぐ近くじゃないですか」

正直、自分でやれ、と思った。

居場所まで分かっているのに、どうして依頼を出したのだろう。

「……実はですね、私が近づいただけで、全力で逃げちゃうんですよ彼女」

「……それは、よっぽど嫌われ……いや、避けられてますね」

「だから、逃げる隙のないこのカフェに何とかうまく連れ込んでくださったら、あとは私がどうにかするしかない問題ですので。お願い、できますか？」

男性はとても申し訳なさそうにこれらの表情を窺っている。そんな顔をされて、断ろうにも断りようがなかった。

「わかりました。やります。……ちなみに、報酬はいくらですか？」

トラブル解決屋「NaN」の料金徴収システムは変わっている。

いわゆる定額制ではなく、またこちらが見積もった額で仕事を請け負うのでもない。依頼主が提示する報酬の金額を見て、それに対して仕事を受けるかどうか、会社側が決めるのだ。

「どうしても、お願いしたいことですから……。四万円です。よし、ようつ。」

「えっ、そんなにいいんですか？」

「はい」

男性は財布の中から諭吉四人を取り出す。報酬の受け渡しは依頼の成功後だが、おそらく現金の用意があることを示すためだろう。嗚呼、懐かしの諭吉よ。六人とは言わない。四人でいい、戻ってきてくれ……。

まあ、報酬の四万はすべて事務所側に行き、俺の手元には決まった給料しか入ってこないのだが。

そういえば、黒が「他の社員は歩合制」だと言っていた。歩合制という事は、働きに応じて給料が増減するという仕組みと受け取っているのだろうか。だとしたら、黒も榎も咲もかなり稼いでいるのではないだろうか。

霊華だけは、どこがどう歩合制になっているのか、今一つピンとこないが。

「では、よろしく願います。方法はお任せしますから、絶対に連れてきてください」

「はい、任せてください」

「あつ、でも口説き落としはできればやめてください。その、彼女があなたに惚れたら、本末転倒ですので……」

「……それもそうですな」

まあ、端から口説き落としなどしようとも考えていなかったが。というか、できるとも考えていない。

「じゃあ、行つてきます」

「頼みましたよ！」

男性はまじめそうな顔をいつそう引き締め、俺に言った。
さあ、わりと面倒臭そうな任務の始まりだ。

第七話 無力感

現在時刻は午前一一時五十分。金曜日、平日。ほとんどの真つ当な社会人はまだ昼休みに入っておらず、働いている頃だ。

そんな時間帯に、女性の写真片手にコンビ二の前ですつとろろしている俺は……傍から見れば、完全に不審者だった。

「でも……早めに待機しとかないといけないし、顔を見逃しても嫌だから写真を収めておく訳にもいかないしなあ……」

とんだジレンマだ。

女性はコンビ二まで昼食を買いに来るらしいから、ここでこうして待つておくしかない。ただ、正直、若い女の人が昼食をコンビ二弁当で済ませるのはどうかと思う。やはり手作りが基本だと思うのだが、案外それがふつうでもないのだろうか。

かく言う俺もコンビ二ではとんどの食事を済ませてしまふのだが、やはり理想の女性像というのは保っておきたい。……黒に話したら、家庭的な女などガキの妄想だと一蹴されそうだが。

それはさておき。

たとえ女性を見つけれたとところで、依頼内容にあるようにきちんとカフェまで連れていかなければ、解決とはいえない。

確か、男性から口説き落としは禁止されていたはずだ。そもそもできると思っていないが、まあ確かに常套手段ではあった。思いつく前に潰されたというのが何とも悲しい。

では、どうやって連れ込もう。……連れ込もう、という響きがあり良いことをしているようには思えないが、この際連れ込む、いや、無理矢理でも引つ張り込むくらいの気持ちで行った方がいいかもしれない。

方法としては。

その一、強行手段、腕力に頼る。これは最終手段だ。

その二、キャッチセールス。自信がない。却下。

その三、ナンパ。いや、口説き落とすとナンパは違うんだ、その、言い回しとかが。だがとりあえず却下。

その四、「あなたの彼氏から話があるそうです」。逃げられる、間違いない。というかもうさつき検討したはずだ。却下。

その五、そろそろ作戦が思いつかない。

その六、もう諦めて良いのではないだろうか。

その七、……。

と考えているうちに、依頼主の彼女さんが近くに現れた。オフィスビルから出て、このコンビニにやってくる。

どうする？ まだ、何も対応が決まっていない。

「でも……やるっきゃねえか！」

突撃した。

「すみません！」

彼女さんが俺の方を向いた。だが、まだ自分が呼ばれているのかどうか確信が持てていないようで、怪訝そうな顔をしている。

「あの、その……あなたです」

「えっ、私？」

彼女が自分で自分を指さす。

「はい。ちよつと、お伝えしなければいけないことが……」

「えっ……な、何でしょうか」

戸惑ったような表情を見せる。まずい、ノープランだ。

「いや、その……ここじゃあ何なので、そのカフェにでも……」

「えっ、でも、その、私用事が」

「大事な用事なんです、すみませんお願いします！ そんなに長時間はとらせませんから」

無計画に突っ込んでしまったが、彼女はそこまで気の強い性格ではないらしく、あと少してカフェに連れていけそうだ、という。

その時だった。

「おい、あんた何してんだ」

「はい？」

背後から男の声がした。直感的に、やってしまった、と感じる。

「人の女捕まえといて何してやがるのかって聞いてんだよ」

「サトシ！」

「サトシ！？」

「って誰！？」

彼女さんが俺の脇をすり抜け、男の後ろに隠れる。男はとても腕が強く、なんというかその、勝てそうになかった。

「あ……す、すいません。人違いでした」

「ああん？ 何言ってるんだ。ん？ おい、それ、写真……」

「あ、いや！ か、彼女さんと僕の探してる人、に、似てますね、アハハハハ……。じゃ、じゃあすいません失礼します」

「おい、コラ！」

そんな風に誤魔化してその場を脱兎の如く走り去るのが、その時の俺にできる唯一の選択だった。

「そうですか……。あいつ、もう他の男を……」

「すみません、依頼、達成できなくて……」

「ああ、いや、あなたのせいじゃないですから。私が不甲斐ないばかりにこんなことになったんですから」

事の一部始終を依頼人の男性に伝え、男性はかなり落胆したような表情だった。まあ、それも仕方がないだろう。何せ、喧嘩をしたというだけできちんと別れを告げられてすらいない恋人に、新たな彼氏ができていたというのだから。

「じゃあ、報酬をお支払いします」

「えっ、でも依頼は達成されていませんが……」

「構いません。どうせ用意していた金ですし、正直今は何もかもがどうでも良くなったというか……」

「はあ」

これで、いいのだろうか。

依頼内容は達成されていないままだ。いや、依頼者側に不備があ

ったのだから、社会的責任の観点から見れば、これで俺の仕事は終わりなはずである。当然、ここで報酬を受け取って帰っても、責められることはないだろう。

だが、釈然としない。本当にこれで、いいのだろうか……。

しかし時は待ってくれない。俺がウジウジと悩んでいる間にも、刻一刻と時間は進む。

「じゃあ、私はこれで失礼します……。今日は本当に、こんなことでお呼びしてお時間をとらせて申し訳ございませんでした」

「いえ、そんな……」

そこで一言、「何か」を言えば、状況を変えられたのだろうか。少なくともその時、俺の中に状況を変えるような「何か」は存在しなかった。

いつも感じさせられる無力感。

魔法を使えたって……何も、解決できない。人助けもできない。失恋の悲しみ一つも癒せはしない。

俺が事務所に戻ると、社員全員がそろっていた。仕事に出ていたのは俺だけだったようだ。

「おつ、おかえりー……ってうわあ、どうしたのその顔」
咲に声をかけられた。

「あ……瀧澤さん。いや、別に何かあったってわけじゃないです」
「依頼失敗したの？」

「いえ、報酬はきちんともらってきました」

俺がそう言うと、咲は頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「ちよつと、いろいろあって、自分の無力さを感じてきたところ何ですよ」

とりあえずそれだけ言っておいた。

俺は受付カウンターの霊華に報酬の四万円を渡し、来客ソファーに寝転がった。

「おいお前」

黒が俺の側に立つ。見下ろされるといふより、見下されるといふ方が正しいと思えるような、堂々たる立ち姿と鋭い目つきだ。

「そんなに無力な自分が嫌か？」

「嫌ですよ、そりゃあ」

「だったら話は早い。お前の才能を、仕事で生かせ」

翻訳すると、「お前の得意な魔法の力」絶大な武力で危ない仕事をしなすべし」といふことだろうか。

その推測はあながち的外れなものというわけでもないようだ。

「ちよつと、今晚吹っ飛ばさなきゃいけない奴らがいるんだ。新人研修の一貫として、槇と咲と一緒に行ってこい」

「今晚ですか。早いですね。準備とかは？」

「ああ、まあ大丈夫だ。大した奴らじゃないから」

俺が言ったのは心の準備のことだったのだが、黒は何を勘違いしたか、武装の準備が何かと受け取ったらしい。最早俺に「行きたくない」と言い張ることすらさせまいとしているのか、あるいは本気で行くに決まっていると思っているのか、判断が付かなかった。

疲弊していた俺に何か返事をする気力など残っておらず、結局無理矢理首を縦に振らせられる形となった。

第八話 それぞれの理由

「安心しろって。俺と咲がいんだから大丈夫だっつの」

「そうそう、大船に乗った気でいてよね！」

よくあるのは大船を泥船と言い間違えるパターンだが、まあパターン通りに世の中のことは運ばない。そういうものだ。

結局、一仕事終えてもなお悶々としていた俺は、夜十時になると、槇と咲に強引に「戦場」へと引っ張り出された。

現在は目的地に向けて、槇の車で移動中だ。

具体的に何をするのかはまだ知らされていない。だが、今まで俺が請け負ってきたようなつい数時間前にやった、痴話喧嘩の取り持ちなどのような依頼とは、次元が違うということだけは、想像がついた。

槇も咲も拳銃を携帯していて、正直どうして民間人が銃を持っているのかなど問い詰めたいことは山ほどあった。しかし「お前も持つとけ。魔法よりむしろこっちのが武器だろ」と槇に無理矢理拳銃を渡されてしまい、犯罪に荷担しているのと何ら変わらない状態になってしまっただけからは、最早聞く気など失せた。

初めて装備するホルスターと防弾チョッキの重量は想像していたよりもずつと重く、これから自分が一千の向こう側に足を踏み入れるのだということをひしひしと感じさせられた。

「いいか、芳樹。今日は『一応』そんな物騒なモンを持っているだけで、別に人を撃ち殺せとかそんな依頼じゃない。ただ、話し合うだけだ」

「社長は『吹っ飛ばしてほしい奴がいる』って言ってましたけど……」

「言葉の綾だろ。まあ、安心しろ。俺らもいるしな」

「うーん、その話し合いの相手が厄介なんだよねー。写真で見たけど、なんか目から耳にかけてでっかい傷跡がびいって」

「ヤクザがらみですか」

「ご名答。ヤクザがらみつつうか、本職だよ」

思わずため息がでる。本当に生きて帰ってこれるのだろうか。

「大丈夫大丈夫、いざとなったら、芳樹君なら手から炎出せば向こうも驚いて逃げるよ！」

「だといいですけど……」

咲のあまりに楽観的な態度に、正直に言うと、危険なものを感じずにはいられなかった。しかし、これも経験の差なのだろうと納得し、受け入れることにする。

経験と言えば。

「あの……向日さん、瀧澤さん」

「ん？」

「何？」

「お二人はどうして、ここに入ったんですか？」

ここ、というのが、トラブル解決屋「NaN」を示すということ
は二人にも伝わったようだった。

「そうだな……やっぱ、金だな」

槇が先に語り始める。

「俺さ、正直言つて、バカだからな。でっけえ会社とかにも入れないし、もし入れてもデスクワークなんざ性に合わねえ。かといって
鳶とかやつても金は入んねえからな。だったら、一攫千金狙えそう
な、なるべく胡散臭い会社に入るしかないと思つてよ」

「槇はそういうところ、意外と賢いと思うよ。堅実じゃないけど、
そういうのも必要つてこと分かつてるのはすごいよね」

咲が槇をほめる。槇は照れくさそうに顔を背けた。運転中なので
前を向いてほしい。

これでデキていないと本人たちがきつぱりと言い切るのだから、
驚きである。

「瀧澤さんは？」

「私？ あー、まあ槇とあんま変わんないかな。というか、槇がこ

こで働いてるって聞いて、『じゃあ私もー』ってくつついて来ただけだよ」

「それでよく、こんな危ない仕事、続けられますね……」

「あはは、おもしろい、つてのが一番かもね」

話を聞いていて、この人、実は何本かネジが外れているのではないだろうか、と思った。まともな人間なら、命を懸けることをおもしろいとは感じないはずだが。

まあ、単にそういう性格なだけなのかもしれない。正直、「魔法が使える」というまともでない俺がまともについてどうこう語るのもおかしい話だ。それに人の性格など、一概にどうとは言えない。

「まあ、そんなとこだな」

槇がそう締めくくって終わりかと思いきや。

「ねえねえ、芳樹君は何でここに来たの？ 黒さんが連れてきたつてのまでは知ってるんだけど、具体的なことは何も聞いてないんだよね」

「あ、俺も聞きてえ、それ」

本当に、この二人は息がぴったりだ。

まあ、特に隠し立てする必要もないだろうと判断し、話す。

「……あまり、聞いてもおもしろくない話ですよ？」

魔法なんて、使えても意味はないんです。

だってどうせ、人前では使えませんかね。

小さい頃はどうして俺が魔法を使うと周りの人たちが離れていくのか、どうして誰も俺以外に魔法を使おうとしないのかが分かりませんでした。それで、習慣的に魔法を使ってしまっようになっただんですよね。

成長するにつれ、魔法を使うと疲れるとかそういうことも意識し始めたから、あまり使わなくなりました。それだけじゃなくて、自分が他の人たちと違うというのも、一〇歳のころによく気づきました。……いや、本当はそれ以前に既に気づいていたけど、認め

たくなかっただけなのかもしれません。

まあそんな風に育ったおかげで、学生時代とかはかなりやさぐれてましたね。そりゃ、環境のせいとかもあるでしょうけど、単に俺が若かったってだけの話です。

そんな俺も高校を出てから……まあ学がないのでまじめに就職したんですが。ちょうど、二年目の秋になる三ヶ月前に、ちよつとしたことで魔法のことが職場にばれて、まあなんというか、会社を辞めざるを得なくなりました。まあそれでもまだこの歳で普通に就職はできたんですけど、やっぱりまた同じように魔法のことがばれて会社にいらなくなるのも嫌でしたから、ニートのまま一ヶ月過ぎました。まあまだ若いから何とかなるとか考えて、適当に生きてましたよ。

そんな時に、社長に会いました。

俺の目の前で、柄の悪いおっさんを蹴っていました。白昼堂々。

おっさんはナイフを持っていて、でももう完全に社長に対して無抵抗になってたんですけど。正直、ナイフ持ったおっさんより社長の方が怖かったです。

喧嘩なのか、仕事なのか、善良な市民の志で犯罪者を鎮圧していたのかはよく分かりませんが、まあどうでもいいですね。大事なのは……俺が、人質にされてしまったということです。

おっさんは自分のことを俺が見ているのに気づいて、いきなり立ち上がってナイフを俺の首もとに当てました。普通、悪漢と向かい合うのが男で人質になるのが女ですけど、立場逆転してましたね。他に人がいない裏路地みたいな場所でしたし、俺が弱そうだって言うのもあったんでしょうけど。

社長は「しまった」みたいな顔をして、おっさんはそれを機に逃げようとして。

俺はおっさんを燃やしました。当然、魔法で。

死なない程度に焼いて、路上に転がしました。焦げ臭い臭いが充滿して、……なんだかねで人を燃やすのは俺も初めての経験でし

たから、驚いちゃって。

その後はまあおっさんの手足を縛ってから、公衆電話から救急車を呼んで逃げました。魔法で傷を治すとか、そんな器用なまねは難しくできませんから。放っておいても良かったんですけど、さすがに死なれても困りますからね。

それで、一息落ち着いてからです。

社長が俺を事務所に来るように誘いました。最初は断ったんですけど、「お前の力が必要だ」だの言われて、まあ俺も職がないときでしたから、この際どんな職場でも良いかと思ってOKしました。ざっと、こんな感じですかね。

そんなこんなで、今はここでこき使われてるってところです。

第九話 893の本拠地へ

「壮絶だな」

「壮絶だね」

「つて言う割には、二人ともあまり驚いてないような……」

「だってよお」

信号で停止したところで、槇が運転席から後部座席の方を向く。

だから、前を向いて運転してくださいってば。

「社長がナイフ持ったおっさん程度に引けを取るわけねえし」

「まあ、芳樹君がいなかったら、まず間違いなくそのまま決着ついていたと思うよー」

「いや、本当、すみません……」

俺が悪いのか。いや、俺が悪いのか？ え？

つい勢いで謝ってしまったが、俺が悪いのか……？

「いや、悪いと思うよー」

「だから心の中を読まないでください」

えひひ、と咲が笑う。これから暴力団の本丸に（話し合い目的ではあるが）切り込もうとしている人間の表情ではない。焦げ臭い仕事に慣れているにしても、限度というものがあるだろう。

この人たちが、俺がつい先日まで見ていた「普通のいい人たち」なのだろうか。俺が見ていた槇や咲とそっくりな別人なのではないだろうかと思える。

「まあ、いいんじゃないか。それで芳樹は今ここにいるわけだし」

「そうそう、芳樹君がドジって人質になったりしたから、私たちの今があるんだよ！」

「もう、本当にすみません……勘弁してください」

この人たちの話し相手をしていると、本当に飽きない。というか疲れる。

信号が青に変わり、車が発進する。しばらく、無言の時間が続い

た。槇と咲はただじつと前を見ていて、真剣な表情をしている。先ほどのまでの無邪気な笑顔から、急に無表情になったことに、違和感と不気味さを感じた。

「芳樹」

「何ですか？」

「そろそろ、これからやる仕事について説明しと思う」

「ここですか？」

「ああ」

車が止まったのは、出発してからおよそ二時間後の、午前零時。場所は、事務所のある宍島市内から隣の笹玉市に移動、繁華街の裏通りにあるビル。「そういう組織」の建物は、雰囲気だけで分かるもののだな、と俺は思った。

見ると、玄関口の横に、表札……というよりは看板が取り付けられている。そこには「中堂組」と、厳めしいフォントで書かれてあった。「……よし、入るぞ」

槇が扉を開けると、見張りらしきチンピラが二人立っていた。チンピラたちは俺たちを見留めるなり、当然のように突っかかってくる。

「ん？ おいおい、誰だよあんさんら」

チンピラに臆することなく、槇が応対した。

「用事があるんだよ。上を出せ」

「ああん？ いきなり出てきた訳分からんガキに会わせられる思うとんかワレエ！」

本当に大丈夫なのか、話し合いで解決するのではなかったのかと思っただ、その時だった。

「おい、何してやがる」

切れ長の目をした、金髪の男が入ってきた。スーツを着ているが一見するとヤクザというよりホストのようだ。しかしその男の纏う雰囲気は、見張りのチンピラとは絶対的に違う何かを感じさせる。

「あ、兄貴！ こいつら、いきなり入ってきて、上を出せだの何だのって生意気なんスよ！」

「始末していいスか？」

「……」

金髪の男は黙ったままそこに立っていた。空気が凍てつき時間が止まる。

と、急に――

「ぐえぼっ！」

「がはっ！」

一瞬だった。

金髪の男が、チンピラ二人の鳩尾を的確に殴り、その場にうずくまらせてしまった。とっさのことに、思わず身構える。

しかし、金髪の男の対応は予想外のものだった。

「やあ、すみません。ウチのクソ野郎どもが、失礼をいたしたようで……さあ、上へどうぞ。ボスに、お話ですね」

俺たちに、というよりは槇と咲に対し、非常に丁寧な態度で上の階へ行くように言った。

ほんの二、三十分前。車中での作戦会議。

「依頼人は時坂組。まあ分かるだろうが、こつちもヤクザだ。宍島市内をうろついて支配した気になっている小規模な暴力団だ。依頼内容としては、中堂組……こいつらは笹玉の方をシマにしているんだが、その中堂組が近頃宍島に入ってきてるらしくてな」

「入ってきてるって、具体的は？」

「なんかね、宍島市内にお金集めを目的にいろんなお店……あまり人前では言えないようなお店を、どんどん作ってるんだって。で、今日はそれを『やめてください！』ってお願いしに行くの」

「そんな安直な……聞き入れてくれるわけないでしょう？」

「それが、そうでもねえんだなあ」

「そうそう。これこそが、黒さんが一代で築き上げた『NaN』ブ

ランドの秘めたる力、ってところかなー」

「本当にそんなにうまく行くんですか……？」

「まあ見てろって。お前はとりあえず、こういう裏の現場に慣れるためだけについてくるってだけだからよ。安心しな」

俺は内心、舌を巻いていた。まさかあの胡散臭さ満点の貧乏会社が、裏の世界に名を轟かせていようとは。社員もたったの五人、否、たったの四人だというのに。……俺は「まだ」その世界に足を踏み入れていないのだから、カウントすべきではあるまい。

「中堂は元気か」

階段を上りながら、槇が金髪の男に問う。それも、極めて不遜な態度で。

「ええ、ボスは健在です」

「そうか。ああ、あと、下にいた奴らだけだよ。あそこまでやらなくていいんじゃないか？」

「いえいえ、『NaN』の向日葵、瀧澤様に失礼があったとあっては、私たちの組もこの界限でやっていくことは難しくなりますから」

……本当に、どれだけの影響力を持っているのだろうか。こんな組織に所属している自分が怖くなる。

「そつえば、そちらのお方は？」

「あつ、彼は吉川芳樹君。ちよつと前からウチで働いていて、裏の仕事は今日が初めてなんです」

咲に、勝手に紹介されてしまった。

「初めまして。國山と言います。あなたも、きっと今後こちらで活躍なさるでしょうね……期待していますよ」

國山の目の鋭さに思わず緊張する。

「あ、は、はい、よろしく願います」

「……向日葵、本当に大丈夫なんでしょうか、彼？」

「心配すんな。意外とやる奴だ」

槇はそう言っ、俺の方を向いた。ニタリ、と口角をつり上げる。

面白がっているとは思えなかった。

「着きました」

話をしながら階段を上っている内に、最上階までたどり着いたようだった。目の前には、大扉がある。ここを開ければ、もう後戻りはできない。そう考えてしまうと、最後の一步がなかなか踏み出せなかった。

すると、とん、と咲が俺の肩をたたいた。

「大丈夫だよ。言ったでしょ、お話するだけだから。芳樹君は、何も心配しなくていいんだから」

「瀧澤さん……」

普段は抜けていると思っていた彼女が、ここまで頼もしく見えるとなると、いよいよ俺のビビりも最高点に達しているようだ。俺は気合いを入れ直すために、両の拳をぐっと握りしめ、大きく息を吸い、そして、吐いた。

そんな俺を苦笑いしながら見つめていた國山が、扉をノックした。

コン、コン。

それは、俺が裏の世界に足を踏み入れる前の、合図でもあったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931y/>

ウィザードライセンス

2011年12月2日18時45分発行